

# 雜 錄

## 全印度工業博覽會に關し日本工學會より移牒の書類

本年2月22日より4月7日迄英領印度デリーに於て開催の全印度工業博覽會に關し今般商工省工務局長より別紙の通り通牒有之候間貴會關係各位に周知方可能御配慮相煩度此段御通知申上候

(昭和9年1月10日付鐵鋼協會宛 工學會發)

## 全印度工業博覽會に本邦側の参加方に關する件

首題の件に關し今般外務次官より商工次官宛別紙寫の通照會越相成候に就ては委細御了承の上貴會會員其他關係方面に周知方可能御取計相成度、當省宛同博覽會當事者よりの書翰譯文同封此段申進候也

追而貴會又は貴會員にして同博覽會に参加の意嚮有之に於ては時日の關係も有之便宜至急直接外務省に御回示相成様致度尙同時に當方へも其の旨御報告相成度申添候(八工 8787 昭和8年12月22日付工學會宛 商工省工務局長發)

## 全印度工業博覽會に關する件

全印度工業博覽會書記長ビシャン、ナレーン(Bisham Narain)先般當シムラに本官來訪明年2月22日より4月7日迄デリーに於て全印度工業博覽會開催せらるゝ筈なる趣を以て同博覽會機械部に如何なる種類のものたるを問はず各種機械類の出品方本邦關係の向に照會方申出ありたるが今般更に別紙寫の通り機械部案内書及趣意書5部其他を茲許送付せるに就ては可成先方の希望に添ふ様御取計を得ば好都合と存せらるゝ處可然御處置相成たる上何分の儀御回示相成たし(昭和8年10月14日付廣田外務大臣宛 在カルカッタシムラ滞在三宅總領事發)

## 全印度工業博覽會に本邦側の参加方に關する件

明年2月22日より4月7日迄英領印度デリーに於て開催の全印度工業博覽會に本邦側の参加方に關し今般在カルカッタ三宅總領事より同博覽會趣意書及案内書添付の上別紙寫の通申越たるに就ては關係の向へ可然御勸誘の上参加方に關する貴方何分の御意嚮至急御回示相煩度此段申進す

本信送付先 商工省、日本商工會議所、日本工業俱樂部、電氣協會(通二普通合 4061、昭和8年11月29日付吉野商工次官宛 重光外務次官發)

## 全印度工業博覽會機械部へ出品方勸誘に關し

同會名譽幹事 Shri Ram Agarwala 氏より

商工省宛來信の譯文

1934年 自2月 間印度デリーに開催さるべき全印度工業博覽會機械部へ出品要綱別紙の通送付せり

本博覽會に於ては印度に於ける工業製造品を展示し以て最近に於ける印度産業發達の狀況を示し併せて其の將來に於ける進歩發達の動向を指示せんとするものなり

本會機械部は諸外國の機械製造業者をして各自の製品を印度人一般に展示せしめ尙印度製造業者及資本家に對し如何にせば産業の發達を成し得るかを具體的に實證せしめむとの意圖により組織せられたるものなり

抑々本博覽會機械部開設の動機は最近印度製造業者間に諸外國に於ける工業製造業者と同等の地位に到達せざるべからずとの覺醒的諸原因が發生したる爲なり農業國たる印度は原料價格の暴落と外國よりの需要減退とにより諸國よりも一層著しき悪影響を蒙れり

失業問題就中印度智識階級の失業問題は印度國民の生活を脅威しつゝあり而して印度人の自尊心は少くとも産業的には諸外國と同等の地位を得むことを熱望しつゝあり如斯印度人の産業的覺醒は將來印度の産業的發達を劃し從而其の發展に伴ふ工業用機械類に對する需要増加の招來せらるゝことは明かなり且つ上述の事實より目下印度内數ヶ所に於て水力發電所が建設せられむとしつゝある事により一層促進せらるゝなり即ち夫は嘗て電力を使用したこと無き龐大なる工業地域に新しき電力使用を可能ならしむるが爲なり

要之現在は最新型の工業用機械類を一般印度人に展示すべき絶好の機會たり且つ英語に無智なる印度資本家及製造業者に對しては新聞廣告等に依る宣傳は效果無きこと及彼等が一般に想像力を缺くことを想倒せば實物展示は彼等に感銘を與ふる最良の方策たること明かなるべし印度産原料を日用品に精製すべき各種機械類、同装置品及農業用機械類に對する需要は目下旺盛なり吾印度産業振興協會は普通商事會社に非ざるが故に其の目的とする處は印度及世界的産業發展に寄與せむとするなり

本博覽會々場費は低廉なりと雖も展示場所に制限あるが故に場所の豫約は可及的速なるが貴國にとり得策たるは疑はざる處なり

## 全印度工業博覽會機械部へ出品方勸誘に關し

同會名譽幹事 Shri Ram Agarwala 氏より

商工省工務局長宛來信の譯文

明年2月22日より4月7日迄デリーに於て開催せらるべき全印度産業博覽會に關聯して計劃中なる同會機械部の趣意書を送付す

現在印度に於ては大小規模の各種工業に要する機械類の需要多く最近2ヶ年の間に於て幾多の大製糖工場及其他各種の會社設立せられたるも此等に要する機械類は殆んど凡てを英國本土より購入したるを以て貴國は是等新需要による利益には與らざる次第なり

以上の趣意書を見らるる時本會の規則、料金及吾が協會に關する事は詳細判明すべし

参考迄に將來發展の見込ある工業の一覽表を2部同封せるを以て該表により貴國より出品せむとする機械類を選択し得べし萬一相當重量ある品にして出品上困難と認むるものあるに於ては模型或は實驗用のものを以て之に代ふるか或は又寫眞、説明圖、青寫眞等に表はしたるものを以てして支障なかるべし

東京工業大學の出身者にしてデリーに於て主要日本品の輸入者たる V. D. Bakshi 氏が本會の幹事なるを以て日本よりの出品機械類に附添の日本會社の代表者に對して會話或は紹介等には何等の不便なく且つ出來得る限りの援助をなす筈なり

先般本會の幹事長は在シムラの日本代表者の一員たる日本總領事に面會本博覽會に關し協議の結果同總領事は本會の趣旨に賛意を表し日本政府に對し以上を關し通信せらるゝ豫定なり

若し同計劃に賛成の上本博覽會に幾多の日本製機械類の出品を見るに至らば將來日本としては印度内に見込ある市場を獲得し從而吾

々の貿易も一層殷賑を齎す事となるべし

尙趨旨書の餘部必要なり或は種々疑問の個所あらば欣然回答致すべく終りに臨み本計劃を充分利用され發表さるゝ様可然御配慮を乞ふ

**英國の石炭液化工業新計畫** (昭和8年11月7日附在英松山商務參事官報告) 英國ウエールス炭坑地方に於て石炭液化工業計畫樹立の爲、サウス・ウエールス工業促進會議(South Wales Industrial Development Council) 關係者會合討議の結果同計畫案作製の件を委員會に附託したることは既報の通りであるが、先般カーティフに開催せられた工業促進會議の席上に於てジー・ノックス教授ロイ・アイリングワース博士及エチ・エチ・メレツの共同設計に成る一計畫案が發表せられた、該計畫案はウエールス炭坑地方の南東露出面に沿て、水素化合法(Hydrogenation)工場1、低温炭化法(Low Temperature Carbonization)工場(1日石炭消費量各1,000t)を設けんとするものである。

(註) 水素化合法はペトロール生産に、低温炭化法は燃料油生産に、夫々最適の方法と稱せられて居るものである。

低温炭化法工場の設備費は、1年間に處理(Carbonize)する石炭に付噸當14志より16志の間にして、之は工場の大き、處理前に石炭の汚れを除去するを要する程度、及油の精度に依り異なるものである。

此種工場は普通1日の石炭處理高250噸、500噸及1,000噸を單位として建設されるのであるが、普通の場所なら其の設備費は夫々70,000磅、130,000磅及230,000磅と推定されて居るから、是等を基礎として上掲の一水素化合法工場と、10低温炭化法工場の設立費總計は700萬磅と見積られて居る。

今其計畫案に従て液化工場設立後の石炭消費額、並産油高推定年額及労働者給職に及ぼす影響見積次の通り。

▲水素化合法工場

石炭處理高	365,000噸
ペトロール生産高	100,000同
炭坑夫需要數(永久的)	1,000人
工場使役労働者數	1,500同
工場建設の爲臨時使役労働者數(1年間)	15,000同

▲低温炭化法工場(1,000噸工場10)

石炭處理高	3,650,000噸
重油生産高	240,000噸
輕油同	140,000同
瀝青同	70,000同
餘剩瓦斯生産高	3,220,000,000立方呎
無煙燃料同	2,520,000噸
炭坑夫需要數(永久的)	4,000人
工場使役労働者數	1,400同
工場建設の爲臨時使役労働者數(1年間)	12,000同

故に以上兩方法に依る工場を合したる全能力は、1年の石炭消費高400萬噸を超え、液體並瓦斯狀燃料約150萬噸、無煙燃料250萬噸を生産することとなる見込である。

次に前掲諸産物の價額は總計5,475,000磅と評價されて居るから、其原料たる石炭4,015,000噸の代價3,001,250磅(噸當15志の割として)を差引、2,463,750磅の剩餘を生ずる譯であるが、此中より更に労働者賃銀、水及電氣料金、維持費及修繕費、諸課税、保険料、償却金及700萬磅の資金に對する利子、其見積額合計1,465,000磅を差引、988,000磅純剩餘を生ずる計算である。

以上に述べた推定價格547萬5,000磅の中、主要項目見積額は次の通り。

	推定生産數量	推定價額(磅)		總額
		單價	總額	
ペトロール	140,000噸	1ガロンに付	1志	2,100,000
燃料油	240,000同	1噸に付	2磅10志	600,000
瀝青	70,000同	1噸に付	2磅10志	175,000
瓦斯	3,220,000,000立方呎	千立方呎に付	6片	80,000
無煙燃料	2,520,000噸	1噸に付	1磅	2,520,000
計				5,475,000

借以上案に對して種々意見の發表があり、討議が行はれたが、先づ第一に水素化合法工場の機能は、低温炭化法工場で製産した油に加ふるに、瓦斯工場等から得られる油を原料として、之を精製する程度に止めることとして如何かと云ふ提案があつた、其理由は斯様にすれば事業發端の資本が約200萬磅少なくて済むのみならず、其生産に付て見ても毎噸2磅10志のタール・オイルが、毎噸15磅のペトロールに精製し得るから、此方が一層有利である、假に24萬噸のタール・オイルを此方法でペトロールに精製するとすれば、180萬磅の剩餘を見込み得られると云ふのである。

又或論者は無煙燃料が多量市場に出る様になると、之を煮いて再び石炭取引に悪影響を及ぼすことになりはせぬかと云ふ者もあつたが、之に對しては將來英國では生石炭を燃焼しなくなり、無煙燃料が取て代るべきものだとの意見を以て、前者の言の様な憂はないと言ふ向もあつた。

更に最重大視せられた點は經理の問題で、先づ其資本に就いて政府から前貸を受けることは殆ど望み薄だから、サウス・ウエールスの市當局に資金供給を仰ぐ様交渉して如何と云ふ者もあり、又地代は地方當局が政府の助成政策に倣つて、一定期間無料にせられたいと云ふ議論もあつたが、結局既設の委員會に更に技術家、商業代表等を加へて意見を纏めしめ、次期會合に報告せしむることとなつた。

尙ノース・ウエールスでも同地方産石炭が、燃料研究所の試験の結果、低温炭化法用として最最適せるものとの折紙を著けられて居るので、今回3萬2,000磅の資金を以て、低温炭化法工場1を建設せんとする計畫があり、目下設計中の趣である。

尙又帝國化學工業會社が、ピリンガムに液化工場建設計畫に關しては既報の通りであるが、先般シェフィールドの製鋼會社に對して、價額25萬磅の建築材料の註文を發した趣であるから、同社の計畫は愈々實現の緒に就いた譯である。(海外經濟事情6の51)

**滿洲國の鐵鑛**(佐山總平、滿洲國の鑛業(上)北海道石炭鑛業會々報第232號より抜萃) 鐵鑛は南滿洲に廣く分布し、主なる鑛石は所謂綽狀鐵鑛と稱へられる赤鐵鑛及磁鐵鑛である。綽狀鐵鑛は含鐵品位35~40%の貧鑛が大部分を占め60%内外の富鐵は案外少ない。重要鑛山は次記の3ヶ所既調査區域の殘存埋藏量及び昭和6年度産額は下表の通りである。

鐵鑛の埋藏及産額(昭和8、滿洲年鑑)

鑛山	埋藏量(單位1,000噸)		昭和6年産額(單位1,000噸)		摘要
	富鐵	貧鐵	富鐵	貧鐵	
西鞍山	不明	4,398	0	0	鞍山製鐵所に使用せらる
東鞍山一部	"	98,100	0	0	
東鞍山西部	"	97,847	0	673,380	
大孤山	1,300	27,448	0	0	
櫻桃園	不明	80,207	143,589	0	
王家堡子	1,300	308,000	143,589	673,380	
計	1,300	400,000以上	0	0	
白家堡子其他	不明	708,000	143,589	673,380	
小計	1,300	708,000以上	143,589	673,380	

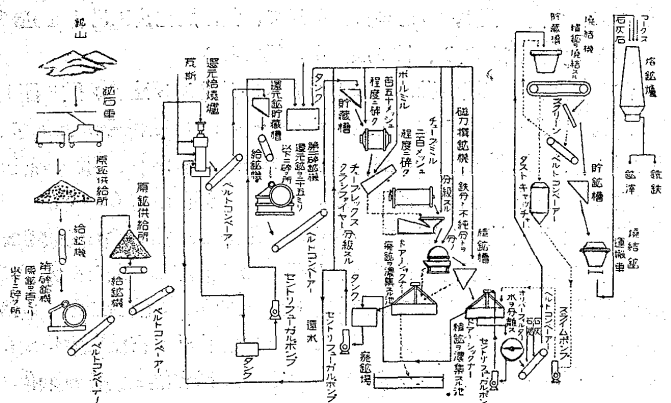
廟兒溝	2,400	200,000	105,180	0	本溪湖製鐵にて使用
弓張嶺	2,500	350,000	0	0	未探掘、但し鞍山にて探掘確定
合計	6,200	1,258,000	249,269	673,380	
總計	1,264,200	以上	922,649		産額は前計と大部異なり居る

(イ) 鞍山鐵礦(昭和製鋼所) 鞍山鐵山は鞍山市街を中心とする 5 哩乃至 10 哩以内の距離に半月形に點列して居る。

即ち北東から東方に互り南西方向に順々に述べると櫻桃園、王家堡子、自家堡子、一擔山、新關明山、關門山、大孤山、小嶺子、東鞍山、西鞍山、鐵石山の 11 個所が擧げられる。鐵床は總て成層鐵床で、鐵石は赤鐵石英片岩又は赤鐵磁鐵石英片岩からなつて居る。鐵床の下磐に近い部分は二次的富化作用を受けて富鐵となつて居るところがある。然し富鐵の量は貧鐵に比して甚だ少く比較的富鐵に富めるは櫻桃園であるが、殘存量は僅かに 130 萬噸で、他の鐵區では之よりも少ない。鐵量は前述の表に掲げた如く全部で 7 億噸以上であるから、1 ケ年 100 萬噸の鐵を製造するために 300 萬噸の鐵鐵を採掘しても優に 200 年以上の壽命がある。

日本にとつて如何に有力資源であるかは今更言ふを俟たないところである。現在は 1 ケ年約 80 萬噸程採掘せられて居るが、近く製鐵所の増産に伴つて幾分増加せらるゝ筈である。鞍山製鐵所に於て技術上特筆すべき事は、貧鐵處理法としての鞍山式還元焙燒法の發明と液酸爆薬を用ふる鐵石の大量發破とである。即ち鞍山式還元焙燒法は現製鐵部長梅根常三郎氏の献身的研究努力に依るところ大なるもので、其の特徴とする處は先づ鐵分が平均 35% 程度の貧鐵を還元焙燒爐に入れて之れを焙燒し、其質を脆弱なして粉碎を容易ならしむると同時に總ての鐵を磁鐵鐵に變化させて磁力選別に便利ならしむるのが特徴である其工程の大様を示せば下圖の如きものである。

鞍山式貧鐵鐵處理法(還元焙燒法)



鞍山鐵鐵は鐵量の大部分が總て鐵分 30~40% の貧鐵であるから、實に此の選鐵問題の成否は鞍山製鐵所の死活的岐るゝ處であつたが、當時者の研究の結果茲に良好なる結果を得て、鞍山鐵鐵は製鐵原料として技術的にも經濟的にも確證を得るに至つた。

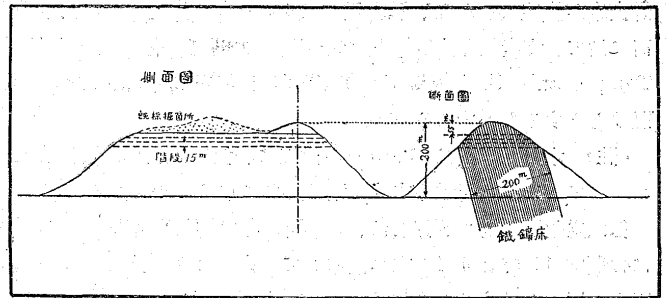
次に液酸爆薬を鐵石の發破に用ふることは從來より歐米の諸鐵山や我國の二、三の鐵山でも實行せられて居ることではあるが鞍山では常時鐵鐵の大量發破をなす事情に鑑み、主として現探鐵部長久留島秀三郎氏の研究に依つて遂にアンストラシオン煤より頗る優秀なる液體空氣吸収用劑を發明し又最も安全適切なる發破法を考案して昭和 4 年以來は此の方法に依つて鐵石を採掘するようになった。其爲め従前に比して鐵石原價を大いに低下することが出来たことは(發破費を約 1/3 に遞減し得た) 鞍山式還元焙燒法と共に鞍山製鐵所の

大なる誇とするに足るものである。

鞍山の諸鐵山の内現在主として稼業して居るのは大孤山である。此山は其名の示す如く、荒涼たる原野の中に孤立せるもので、頂上に立つて東に向へば遠く有名なる千山の靈峰を望み又近くは處々に鞍山に屬する他の數多の鐵山を指摘することが出来るし眼下には渾河の一支流が帶の如く細く横つて居て如何にも大陸的な氣分に浸るところである。

山の形は鐵脈の走向に沿ふて長く約 1 km ある。下圖は山の正面圖及び走向に直角に截つた截斷面の略圖であつて山の高さ約 200 m、鐵脈の厚さ約 200 m、鐵量は水準以上 1 億噸と稱せらる。

大孤山の見取圖



採鐵法は露天掘で一階段の高さは 75 m、液酸爆薬を用ひて此等の階段を順次に爆發して居る。

大發破の一例	1 回使用火藥量	3,541 kg
	爆破せる鐵石量	39,774 tons

實に大孤山の發破は天下の壯觀である。

液體空氣製造機はハイランド機 (450 HP. 能力 1h. 279 kg) リンド機 (120 HP. 能力 45 kg. 1h) の 2 臺あつて必要に應じて時々運轉して居る。液體酸素 1 kg の經費は 5.7 錢乃至 1.15 錢程度である。運搬法は電車が鐵車を曳いて山を數回鉢巻にして所要個所迄昇つて行つて鐵石溜から鐵石を運搬して降る。最近 5 ケ年の鞍山の原鐵産額は次の如し。(單位 t)

年次	昭和 2	昭和 3	昭和 4	昭和 5	昭和 6
産額	889,009	604,286	837,025	691,167	816,969
	734,190	538,000	739,954	523,893	673,380

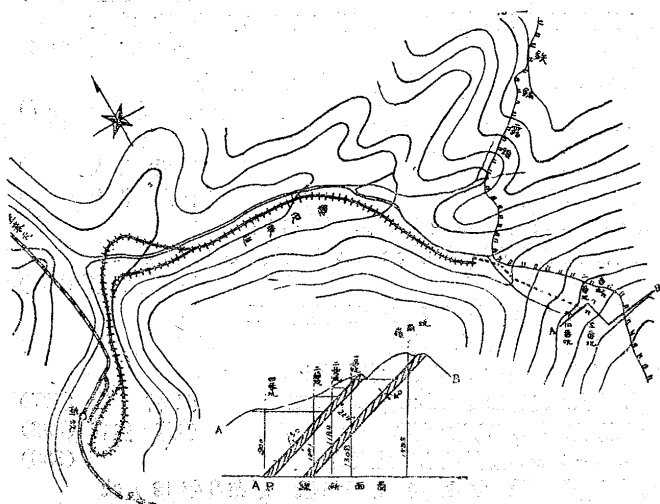
鞍山製鐵所は昭和 8 年 6 月に滿鐵より分離して昭和製鋼所に屬するものとなつた。從來の製鐵所は銑鐵の産額年約 28 萬噸であるが設備は年産 40 萬噸の能力がある。昭和製鋼所設立の目的は在來の製鐵設備の全部を働かして銑鐵 40 萬噸を造り、其の内 32 萬噸を用ひて鋼鐵を製造する計畫である。

目下盛に製鋼工場の建設中で昭和 10 年 3 月中に完成し 10 年度より製鋼作業を開始する豫定である。故に鐵石原料の増産も之に應じて實行せらるゝ譯で、此の爲めには屑鐵に代る優良なる鐵鐵石を必要とするに至り、之れを鞍山の東方數 10 km にある弓張嶺の富鐵を採掘する計畫であるさうである。此計畫が實施せられた暁は、鞍山に於ける従業員は昭和 7 年の 2 倍になる豫定で今後鞍山は名實共に滿洲重工業最要の中心地として發展する見込である。

(ロ) 廟兒溝鐵山(日滿合辦本溪湖煤鐵公司) 廟兒溝鐵山は本溪湖製鐵所へ原料鐵鐵を供給する鐵山である。安奉線南坎驛の北東に位し、輕便鐵道 8 km にて山麓に達する。南坎本溪湖間約 30 km である。

廟兒溝鐵山 鐵床は花崗岩、片麻岩又は雲母岩中に層狀をなして存在する大なる赤鐵磁鐵鐵床で、其の區域は頗る廣く、露頭走向略南北、延長 730 m、傾斜西に約 45° である。鐵床の主體は貧鐵であつ

廟兒溝鑛山



て、此の内に主として磁鐵鑛より成る扁桃狀の富鑛層が3つある。現在採掘中のものは主として本鑛(厚さ平均18m)であつて、此れに次いで嶺南鑛(厚さ最大18m)も採掘して居る。

鑛量は 貧鑛(品位平均33%)……………2億噸  
富鑛(品位60~68%)……………240萬噸

採掘法は圖の示すが如く露頭より下方に一番より四番の水平坑道を掘鑿し1種の上階階段掘に土砂充填を行ひ、充填土砂中に棹組をして鑛石落しを設け各坑道地並より3m内外の鑛柱を残して止める。

四番坑以上は大部分を採り盡し、現在は四番坑道以下鑛押しに八番坑道迄採掘中である。最近の鑛産額は次の如し。(單位t)

年次	昭和2	昭和3	昭和4	昭和5	昭和6
産額	70,000	106,000	148,646	141,061	105,680

採鑛夫1人當採鑛量は0.68噸(昭和5)なり。本溪湖煤鑛公司の所屬鑛山は廟兒溝以外に次の12ヶ所あるが何れも未だ採掘するに至らず。

梨樹溝、臥龍村、歪頭山、載金峪、馬鹿溝、青山背、駱駝背子、王子崗、八盤嶺、太子河沿、通遠堡。

本溪湖製鐵所のある處は有名なる本溪湖炭鑛の所在地で炭鑛よりは年産約50萬噸餘の高度瀝青炭を産し之れより優良なる製鐵用の骸炭を現地で製造して居る。又附近よりは石灰石、耐火材料等を豊富に産し用水にも不便が無いことは製鐵上質に恵まれた條件を具へて居るのである。唯原鑛を38kmの巨離にある廟兒溝より運搬して來ねばならぬことは鞍山より不利な一點である。

廟兒溝の貧鑛を製鐵原料に用ふるためには南坎驛附近に選鑛場を設けて種々研究努力中である。最近廟兒溝貧鑛處理研究報告(工學士尾崎眞一、昭7,11)なる研究發表があつたが斯の數億噸の貧鑛處理は必ずや近き將來に於て實現せらるゝものであらう。

(ハ)弓張嶺鐵鑛(日滿官商合辦弓張嶺鐵鑛無有限公司)遼陽の東南約45kmにある。未だ鐵道の便が無い。鑛床は鞍山と同様にある。

埋藏量は 貧鑛(品位約40%)……………3億5,000萬噸  
富鑛(品位60~68%)……………2,050萬噸以上

本鐵山は鞍山、廟兒溝と共に滿洲の三大鐵鑛の一である。採掘權は飯田延太郎氏設立の日滿官商合辦弓張嶺鐵鑛無有限公司(資本金100萬圓)が持つて居る。未だ採掘せられないが、其の富鑛に對しては特に期待せられて居る。先に述べた如く鞍山製鐵所の増産に伴ふて此の富鑛が採掘せらるゝ豫定で只今準備中である。

日本製鐵株式會社公稱資本 日本製鐵株式會社評價審査特別

委員會は11日午後商相官邸に開催、中島商相以下各委員、福田鑛山局長、中井製鐵所長官等出席中井長官、福田局長より從來の民間各社との交渉経過を説明した後商工當局の製鐵所及び民間各社の資産評價原案を可決し來る26日の審査委員會總會に諮ることとなつたが第一次合同は既報の如く八幡製鐵所を中心に民間6社となることに決定した、なほ民間6社中東洋製鐵は目下同社株が東株長期市場に上場中であるが、先限落手續は3月末となる關係上同社の合同參加實現は4月早々となる模様である、同日委員會において決定した1所6社の現物出資評價額は次の如し。

(單位1,000圓)

八幡製鐵所	239,190	輪西製鐵	11,600
釜石鑛山	22,990	三菱製鐵	17,050
富士製鋼	2,770	九州製鋼	720
東洋製鐵	13,880	合計	314,690

以上によれば日本製鐵株式會社設立に關する各社の現物出資額は3億1,469萬圓であるが、この外八幡製鐵所の流動資産8,000萬圓中出資可能額は約4,500萬圓でこれが前記評價額に加はるので結局1所6社の總出資額は約3億5,900餘萬圓に上るが、重役持株の緣故募集額31萬見當を募集されるものと見れば、結局日鐵の公稱資本金は3億6,000萬圓になる見込である。

重役候補1所6社合同による日本製鐵株式會社は本月下旬創立總會開催の運びとなつた、その規模の宏大なると使命の重大さよりして、同社運営の局に當るべき重役の人選は極めて慎重を要するが目下有力なる重役候補に擧げられてゐる諸氏は先づ取締役會長に郷誠之助男、同社長に中井製鐵所長官の就任はほぼ決定的と見られ、常務取締役(副社長制は採らざる模様)に就いては參加會社の重役を推す説と全然中立の人物を可とする説があるが、何れにせよ決議、執行の兩機關を通じ取締役としては民間6社首腦重役のほか商工省、陸海軍兩省、大藏省、製鐵所並に設立委員會等を網羅して適任者を就任せしむる方針で、目下有力候補と目されてゐるのは大體次の諸氏である。

【常務取締役】商工省鑛山局長福田庸雄、製鐵所技監野田鶴雄、商工省營繕管財局長總務部長太田嘉太郎、富士製鋼社長瀧澤正雄、釜石鑛山常務西村小次郎の諸氏。

【取締役】牧田環、一色虎兒(三井)、松田貞治郎、三好重道(三菱製鐵)、鮎川義介、西野惠之助(東洋製鐵)、安川清三郎、松本健次郎(九州製鋼)、渡邊義介(製鐵所)、吉田豊彦(陸軍省)、荒城二郎(海軍省)、井坂孝、各務鎌吉、矢野恒太(設立委員會)の諸氏。

來月1日開業 日本製鐵會社創立も接近したので合同參加4社の代表者牧田(輪西)、西村(釜石)、松田(三菱)、瀧澤(富士)の諸氏及び中井製鐵所長官は10日製鐵所東京出張所に參集、日本製鐵の今後の創立経過に就き協議した結果、同社はよいよが2月1日を以て業務開始と決定した。(東朝)

日本製鐵會社設立を商相報告 12日の閣議において中島商相より日本製鐵會社設立に關し詳細報告したが、その内容は次の如くである。

去年の10月以來設立委員會並に評價委員會を開き、去年末に至り大體參加各社の協定が經り昨日(11日)最後の製鐵事業評價特別委員會を開き決定した譯であるが、參加各社は八幡製鐵所の外6社である、よつて參加會社は來る20日から24日までに株主總會を開いて最後決定をなした上、新會社は26日に創立總會を開き、2月1日より營業を開始するはずである、出資財産の評価は評價委員會で厳正に決定した結果、7社の總額は約3億2,000萬圓であり、その外約4,500萬圓が流動資本として製鐵所から出資するはずである、またこの外、大藏省預金部より3,000萬圓の融資を受けてゐる、會長及び社長を初め重役の人選は未だ民間側が定つてゐないが、政府側より12名、民間側より12名となるはずで、定款には重役25名とするはずである、しかして參加會社は八幡製鐵、輪西製鐵、釜石鑛山、東洋製鐵、九州製鐵、三菱製鐵、富士製鋼である。(中外商業)

内外最近刊誌参考記事目次

Metal Industry (New York), Dec., 1933.

- Electroplating Generators. Charles J. Schwarz. pp. 403-404.
- Rotary Grinding Before Plating. Francis A. Westbrook. p. 405.
- Cleaning and Re-sharpening Files. A. Eyles. pp. 406-407.
- Deposition of Pink Gold. Alfred K. Pritchard. p. 408.

The Metal Industry (London), Nov. 17, 1933.

- Magnetic Pulleys in the Non-Ferrous Metal Industries. C. H. S. Tupholme. pp. 485-486.
- Rins-Type Heating Resistors. O. Junker. pp. 487-489.
- The Effect of the Addition of Lead on the Hardness of Certain Tin-Base Bearing Alloys at Elevated Temperatures. J. N. Kenyon. pp. 493-498.

The Metal Industry (London), Nov. 24, 1933...

- Metal Spraying. W. E. Ballard. pp. 509-512.
- Control Testing of Metallic Castings. R. B. Mears. pp. 517-518.
- Plating Shop Casting. E. A. Ollard. pp. 519-520.

Heat Treating and Forging, Nov., 1933.

- The Time Required for Heating Steel. J. D. Keller. pp. 65-66.
- Engine Exhaust Pipe Failures. C. C. Hodgson. pp. 67-69.
- Forging Temperatures of Steel. J. H. G. Monypenny. pp. 70-72.
- Varnish Oven for Stator Coils. J. M. Enders. p. 77.
- Importance of Insulation on Furnaces. Bernard Thomas. pp. 78-79.
- Servicing a Noble Metal Thermocouple. R. S. Bradley. pp. 80-81.

Zeitschrift für Metallkunde, Nov., 1933.

- Einfluss des Gussquerschnittes bei Aluminium-Segierungen. M. Schwarz. s. 269-274.
- Kristallstruktur und Ferromagnetismus der Mn-Al-Cu-Legierungen. O. Heusler. s. 274-277.
- Die Erniedrigung der Schwingbestigkeit durch Korrosion und ihre Erhöhung durch Oberflächendrücken. O. Föppl, O. Behrens und Th. Dusold. s. 279-282.
- Einfluss von Verunreinigungen auf die Korrosion von Zink. O. Bauer und P. Zunker. s. 282-284.
- Die Aluminium-Lichtbogen-Schweißung und einige Eigenschaften des Schweißmetalles. L. Anastasiadis. s. 285-286.
- Die wesentlichen Merkmale gespritzter Metallüberzüge. H. Reiniger. s. 286-288.
- Vornormen der American Society for Testing Materials auf dem Gebiete der Nichteisenmetalle. Paul Melchior. s. 289-290.
- Aushärtbare Aluminium-Eisen-Nickel-Kupferlegierungen. E. Vaders. s. 291-292.

(若林)

工業化學雜誌 第36編 第12冊 昭和8年12月

- 骸炭爐煉瓦の變化に就て 黒田 泰造(1574)
- ポルトランドセメント原料の粘土に就て(第1報) 眞田 義彰(1625)
- 凝灰岩と石灰石とよりポルトランドセメントの試製 眞田 義彰(1631)
- ポルトランドセメント原料の粘土に就て(第2報) 西川 虎吉(1678)
- 凝灰岩の加熱變化
- 我國工業原料鹽の供給に就て

鑄物 第5卷 第12號 昭和8年12月

- 鐵道工場の鑄物職場に於ける作業研究に就て 李子潤二郎(791)
- 特殊鑄鐵ニ、ハード 藤原 唯義(804)

地學雜誌 第45年 第538號 昭和8年12月

- 日本に於ける産金 赤木 健(581)

水曜會誌 第8卷 第3號 昭和8年10月31日

- アルミニウムを主成分とするアルミニウム、銅、滿俺三元系合金の平衡状態圖に就て 澤本 八衛(239)
- 熔融せるアルミニウムに依る鹽化物の分解程度に就て 原田 隆康(245)

- Tschechoslowakei (Czechoslovakia)の製鐵工業 澤村 宏(249)

- 北米合衆國金屬鑛業の變遷 藤田 義象(287)
- 石炭粒子群を直立管中にて浮遊せしむる上昇水流に就て 三雲英之助(295)
- 南洋爪哇ソロ銅山産銅鑛の優先浮選研究報告 山田賀一、佐藤信一(307)

朝鮮鑛業會々報 第12月號

- 鑛業の漫筆 臥牛山人(2)
- 浮選法理論講義 岳陽學人(5)

理化學研究所彙報 第12輯 第12號

- 鐵、銅及び鑛石の含むマンガン定量する方法に就て 關野幹次郎(927)

經濟資料選卷 第187 東亞經濟調查局

- 獨逸の國家企業(全卷)
- 採鑛冶金月報 第11年 第12報
- Belgium及Luxemburgの製鐵工業 澤村 宏(327)
- 北海道に於ける石炭鑛業 伊藤 憲吉(333)
- スエーデンの鐵鑛及木炭熔鑛爐(338)

日本鑛業會誌 第49卷 第584號 昭和8年12月號

- 美唄の探炭計畫に就て 川島 三郎(887)
- 日本の鋼製鍊に就いて 池田 謙三(910)
- 國有林經營と鑛山 島田 春夫(927)

明電舎ジャーナル 第9卷 第9號 昭和8年12月

- 粘性アルミニウム電解蓄電器に就いて 速水 永夫(105)

銻接協會誌 第3卷 第6號 昭和8年12月

- 鑄鐵の電氣銻接 井口庄之助(339)
- 交流電弧銻接機の負荷特性と銻接棒に就ての一考察 岡田 實(344)
- 汽罐取締令制定協議會提出議案(371)

海外經濟事情 第6年 第51號

- 新嘉坡石炭市況(10月)(昭和8年11月22日附在新嘉坡田村總領事報告)(18)
- 英國の石炭液化工業新計畫(昭和8年12月7日附在英松山商務參事官報告)(21)

電氣製鋼 第9卷 第12號 昭和8年12月15日

- 白金、白金ロヂウム熱電對の最新溫度、電壓表に就て 金友 濤聲(459)
- 高溫機械用鋼材の金相學的考察(其の2) K. H. N. 生(466)
- 合金鋼及び普通鋼中のモリブデン及びアルミニウムの新定量法 野田 一六(473)

日本ニッケル時報 Vol. 2 No. 1

- 獨逸に於けるニッケルの研究 ドクトル、インゲニウル、エム、ウエーラート(4)
- 最大鍛材の機械的性質上に及ぼす重要な合金元素の影響に就て<sup>1)</sup> ドクトル、インゲニウル、ハー、コルシヤン、エッセン(27)
- ニッケルと造船工業上の諸問題 ドクトル、エ、シアンスジャン、ガリブール(53)
- 新ニッケル、滿俺鋼 ジョン、ハウ、ホール(67)
- 高力鍛造物用ニッケル、クローム、モリブデン鋼 エム、アール、チエイイス(83)

東京工業大學々報 第2卷 第12號

- 工具の製作に關する研究(第2報)<sup>1)</sup> 研磨車の研磨作用の研究 關口八重吉、長谷川一郎(735)

金屬 Vol. IV No. 1 新年特別號

- 鑄鐵と其の電氣抵抗 渡邊軍治、下河邊 收(5)
- 硅石煉瓦の融蝕現象に就て 吉木 文平(11)
- 窒化鑄鐵(15)

北海道石炭鑛業會々報 第232號 昭和9年1月

- 北海道炭鑛採炭作業の合理化 松坂 將々(1)
- 滿洲國の鑛業 佐山 總平(17)
- 水式選鑛の科學的基礎(3) 松野 榮治(68)

大日本鑛業協會雜誌 第42集 第493號

- 耐熱系ゼーゲル錐のX線的研究 仲井俊雄、深見芳雄(1)
- 機械學會誌 第37卷 第201號 昭和9年1月
- タービン翼車の彎曲振動に伴ふ翼の振動に就て

- 鋼の疲勞限度に對する油及水の影響 小野 鑑正 (8)  
 工業化學雜誌 第 37 編 第 1 册 昭和 9 年 1 月 最近の金屬材料に就て 八田八郎次 (75)  
 熔融電氣製鐵爐の設計法に就て 原田 梧樓 (20) アルミニウム製造法に於ける近年の進歩 山口 珪次 (94)  
 瓦斯の濕度圖表に對する壓力變化の補正用モノグラフ 龜山 直人 (109)

昭和 8 年 11~12 月中 (八幡) 製鐵所 銑鋼 生産 高表

	銑 鐵			鋼 塊			鋼 材		
	生産高	前月比較	1 月以降 累 計	生産高	前月比較	1 月以降 累 計	生産高	前月比較	1 月以降 累 計
11 月中	93,789	+ 5,294	915,766	130,115	+ 8,709	1,403,135	107,404	- 7,739	1,110,641
12 月中	97,211	+ 3,422	1,012,977	141,911	+ 11,796	1,545,046	114,648	+ 7,244	1,225,289

主要製鐵所に於ける鐵鋼材生産 (單位噸)

鐵と鋼第 19 年第 12 號掲載本表に 9 月分とあるは 10 月分の誤りにして茲に訂正す。 - 減

品 目	11 月 分			一 月 以 降 累 計			
	昭和 8 年	昭和 7 年	比較増減	昭和 8 年	昭和 7 年	比較増減	%
銑 鐵 (内地朝鮮滿洲鋼片)	152,941	91,975	60,966	1,437,741	1,063,259	374,482	35
普 通 鋼	36,910	38,482	-1,572	394,111	328,606	65,505	19
販 賣 鋼 片	290,631	198,237	92,394	2,746,747	2,093,807	652,940	31
同 鋼 片	7,470	6,366	1,104	86,253	65,323	20,930	32
鍛 造 鋼 材	11,761	9,179	2,582	105,948	126,399	-20,451	16
普 通 鋼 壓 延 鋼 材	5,381	3,721	1,660	52,167	26,122	26,045	99
	234,315	185,581	48,734	2,245,657	1,738,373	507,284	29
普 通 鋼 壓 延 鋼 材 内 譯							
厚 0.7 mm 以下 鋼 板	23,456	23,882	-426	277,068	261,255	15,813	6
其 他 鋼 板	41,652	33,155	8,497	433,019	277,747	155,272	55
棒 形 鋼 條	72,679	48,552	24,127	596,043	452,180	143,863	31
軌 鋼 條	25,193	23,339	1,854	206,332	221,639	-84,693	28
線 鋼 材	29,407	21,396	8,011	243,224	216,874	26,350	12
鋼 管	29,032	21,561	7,471	253,527	195,126	58,401	19
其 他	8,876	9,579	-703	105,069	87,856	17,213	19
	4,020	4,117	-97	31,375	25,696	5,679	22